支援実践部門活動報告
学習支援ボランティア活動等を通じた学生の育成

門脇 啓一・吉田 利弘・伊藤 芳郎

支援実践部門活動報告

学習支援ボランティア活動等を通じた学生の育成

門脇啓一*・吉田利弘*・伊藤芳郎*

Training Students through Volunteer Activities

Keiichi KADOWAKI, Toshihiro YOSHIDA and Yoshiro ITO

要約：本稿は、教育復興支援センターの取組、主として支援実践部門の平成26年4月～27年1月の取組を報告する。

本センターは、平成23年3月11日の東日本大震災によって甚大な被害を受けた宮城県内の学校教育の復旧・復興——児童生徒の確かな学力の定着・向上、現職教員の各種支援等を期して、同年6月28日に設置された。

被災から4年目を迎えた26年度、センター支援実践部門においては、学習支援を中心とする被災地からのボランティア学生の派遣要請にほぼ応えることができた。そして、ボランティア協力員を中心とする学生組織が本格的に機能し、各ボランティア団体の活動内容の充実が図られるとともに、学生主催の被災地視察研修、大学祭、各種研修会が企画・運営された。また、27年3月に予定されている国連防災世界会議・仙台大会の一端を担う取組などとともに新聞、テレビ等に紹介され、学内外から高い評価を得た一年であった。

本稿では、こうした学生ボランティア活動の具体的な実践報告や感想など、極力学生自身の言葉で報告することにした。それにより、それらの活動が本センターの所期の目標達成に貢献するとともに、参加学生の人間的成長を促し、教師に求められる資質・能力の育成に寄与するであろう、という仮説を検証していきたい。

キーワード：使命、支援、育成、主体性、継続性

1 はじめに

東日本大震災から4年が経過しつつある。あらためて時の流れの早さに驚くばかりである。それに伴い、震災被害や復興支援への関心が薄れつつあるとの懸念を抱く。例えば、27年元日の新聞各紙を読むとその感を強くする。

平成27年は戦後70年目にあたることから、全国紙の一面や社説からは戦後の歩みを回想するとともに、未来へ向けた国づくり、経済戦略、東アジアの協調が提言され、震災からの復興を想起させる直接的表現は影を潜めている。わずかに1月17日が阪神・淡路大震災から丸20年を迎えることとの関連で、昨年大きな被害のあった台風による土砂崩れ（広島市）、火山の噴火による被災（御嶽山）に加えて、東日本大震災も取り上げられ、今後の大規模災害への備えについて言及されているくらいである。

一方、地元紙、河北新報一面では、「防災庁舎31年まで県有化」として宮城県が南三陸町の震災により鉄骨のみ

* 教育復興支援センター支援実践部門

残った防災庁舎の保存を打診する意向を伝えている。また、福島民報では「新しい福島をつくる 古里への誇り共有を〔新春特別座談会〕「未来をつくる ふくしまの力で」、原発事故後の汚染水対策の難しさ、帰郷に向けた歩みの遅さや困難さの指摘とともに、標題にある具体的提言がなされている。まさに、被災地とそれ以外との隔たりがこれまで以上に大きくなっているように思える。

学習支援ボランティア活動等の現地指導で被災地を訪れ、各学校や児童生徒の実情を伺うと、一様に、課題解決に至る道は険しく長時間を要するであろうとの見解である。また、たとえ短期間のボランティア活動への参加ではあっても、実際に被災地の復興状況等を目の当たりにし、身近に子どもたちの生の声や態度に接した学生の報告、感想からもこのことを裏づけるような記載が認められる。

2 教育復興支援センターの取組

(1) 支援実践部門

支援実践部門は、前述した本センターの目的遂行のために、主として被災地における現在進行形の教育復興支援のニーズを的確に把握し、6つの支援プログラムに基づき的確な支援を行うための組織である。研究開発部門の成果を生かしながら、地域への貢献や学生の人材の育成に努めている。

①学習支援ボランティアの実際（26年4月～12月）

各市町村教育委員会、各学校からの学生派遣の要請およびそれに応える派遣実人数、延べ人数は、前年度とほぼ同様である。しかし、提携する全国の教員養成系大学からの参加は大学数、派遣実人数とも少なくなっている。その差を埋めたのが、後述するボランティア協力員を中心とする本学学生の意欲的参加である。特に、2年生が数多く参加してくれた。

長期休業中、本学、全国の教員養成系大学、県内各大学の学生ボランティアが力を合わせ、被災地の各学校で学習支援を実施してきた。その中で、特に他大学生と宿泊を共にし、単に生徒との関わり方や指導法の反省ばかりでなく、さまざまな点で意見交換できたことに意義を感じたとする本学生が多い。県外からの学生ボランティアの熱い思いに触れ、被災地にある本学生としての自覚に目覚め、自ら教育に携わろうとする決意、使命感の萌芽とも認められる感想を残している。今後とも、彼らを核としてボランティア学生の量的拡大、質的充実、意識改善を図っていきたいと考える。

問題点としては、避けがたいことではあるが小中学校と大学の夏休み期間が大幅にずれていることである。長く提携を図っている教委、学校にあっては、大学の夏休みに合わせて7月下旬の派遣要請を避け、8月、それも盆明けの時期を設定していただいている。具体的には、8月4日（月）～8日（金）、18日（月）～22日（金）の日程が8割を占めており、それに続くのが盆期間前後の土日を含んだ日程を組む教委、学校等である。

このように日程が限られるため、数多くの学生の確保が最も重要である。その対策としては、学生募集の日程表を一律に示すだけでなく、協力員（運営委員）の人的ネットワークを駆使して目標数を満たすことも多い。

そうしたなか、一つの解決策が検討されている。それは、学生の派遣を小中学校の長期休業中を避け、大学が休業中の9月や3月に行うことである。この時期であれば学生ボランティアの確保は比較的容易である。受け入れ側の学校、教職員の理解があれば拡充することが可能になる。これまで教員の授業補助として個別に自宅近くの学校へ派遣したり、大学のバスで朝夕の送迎を受けた活動がなかったわけではない。また、すでに丸森町や女川町の小学校で実施されてきたことではあるが、それを他地域に広げ、活動日数、参加者数を拡充しようというものである。

より具体的な例として南三陸町のケースを取り上げる。26年9月16日（火）～19日（金）の日程で、南三陸町立名足小学校に教員補助を行うために学生を派遣した（前泊を含め4泊5日）。南三陸町は津波により大きな被害を受け、現在も多くの児童生徒は仮設住宅からスクールバスを利用して登下校している。そして、バスの運行は授業日であれば特に問題はない。学生への給食の提供もあり得る（実費負担）。それが、夏休み中、希望

者を対象とする学習支援、部活動指導では学校側の対応も著しく困難となる。一方、この時期の学習支援となれば、自学自習支援とは異なり授業中のT2の役割を担うなど、教育実習の経験のない1,2年生にとっては荷が重いといえる。しかし、事前指導の充実によって学生の心理的負担の軽減を図っていききたい。

なお、27年3月、同じく南三陸町立志津川中学校へ教員補助としてボランティア学生を派遣する予定であり、県外の他大学、本学学生の参加者を募集中である。

②「環境・防災教育」(必修科目)の講義

25年4月、新教科「環境・防災教育」が1年生の必修科目としてスタートした。これは防災・減災教育が今後の学校教育現場で取り組むべき必須課題であり、社会的要請に応えようとするための開講でもある。当面、単独の科目とはせず、従来の「環境教育」に防災・減災の領域を加味するとともに、震災への具体的対応、心の問題等を、学校現場にあって実際に対応した経験のあるセンター教員3名が各2コマずつ担当することになった。その分担内容は、東日本大震災後の学校の現実、学校における安全管理、教師に求められる心のケアである。

講義では、被災地の現状を伝えるとともに、復旧・復興へ至る道が険しく長期間を要すること、受講する学生の多くが数年後被災地の学校へ教員として着任した場合、必ず対応が求められることを説いた。また、学習支援を中心とするボランティア活動への参加を訴える機会ともした。講義後、提出を求めたレポートでは、将来教師を目指す上で、必ず必要とされる震災対応、児童生徒の命を託されている教師としての使命、次の機会にはぜひボランティアへ参加したいと意志表明する学生が多く認められた。

○(1年女子)今日の講義では「微力ではあるが無力ではない」という言葉に胸打たれた。確かに心のどこかに、私一人が動いたところで何になるのだとの後ろ向きの考えがあったと思った。震災で被害を受けた人たちが心に大きな傷を負っていることくらい分かっていたはずなのに、どこか他人事だと思ってためらっていたことに恥を覚えた。将来教師になりたいという夢もあるわけだし、傷を負った人の支援をすべきだと本気で思った。「したい」だけでなく「する」といったように思いを形にして行動するよう心がける。2015年はそういう年にしようと思った。また、「微力ではあるが無力ではない」という言葉は人生につながる言葉でもある。思うことはできてもそれを行動に移すことはなかなか難しい。大学生というのは最後の学生時代。社会人になれば自由にしたいこともできないであろう。今を大切に考えよう、そう思った講義であった。

(注)「微力ではあるが無力ではない」は、早稲田大学の学生ボランティア活動等を記録した冊子のタイトル。

なお、教職大学院においても26年10月より「学校教育・教職研究A」の授業のなかに「防災と防災教育」が導入され、2名のセンター教員が担当している。

③各教育委員会、校長会、各学校との連携の強化

本学は栗原市、気仙沼市などの数多くの教育委員会と提携している。それにより、長期休業期間中、各教委主催の学習会へ学生を派遣し、学習支援にあたってきた。また、南三陸町立志津川中、登米市立南方中など学校独自の学習会に県外の学生とともに本学学生を何度も派遣してきた。多くの学校は学習支援が中心であるが、部活動や環境整備、進路相談の場が設けられ、児童生徒と緊密な関係を結ぶことができた。その結果、次の機会にも遠く県外から再訪する学生がいたり、個別的に本学学生と旧交を温める学生もいる。

また、今年度は、仙台市立小・中学校校長会による教育復興実践事例集「明日の子どものために」(第3集)、同中学校校長会によるDVD「ともに、前へ——過去から未来を創ろう、中学生の力で」および仙南地域の亘理町・山元町立小・中学校校長会による「未来をめざして——亘理町・山元町教育復興の歩み」などを刊行している。これらは、震災の被災状況や各教育委員会、学校等の具体的な取組、復興に向けた実践について、記憶があせないうちに記録として残そうとの思いが結実したものである。本「紀要」とともに本学の社会貢献として、引き続き継続して後世に伝えていきたいと考えている。

さらに今年度は、栗原市教委からの依頼により学力向上を目指した研修会の講師や、美里町教委主催の学び支

援員研修会の講師などを務めている。

(2) 学生ボランティアの派遣

①学習支援ボランティア

震災直後はさまざまな種類の支援要請があったが、現在では主として長期休業期間（夏・冬・春休み）を利用して、各教委・学校の企画した実施要領に基づき学生を派遣し、学習支援する活動がほとんどである。中学生対象の「学府くりはら塾」では、学生が履修範囲を踏まえ作成した問題や過去の入試問題から選択した問題に取り組ませ、その後解説を加えるなどの講義形式をとっている。しかし、ほとんどは学校が用意した夏休みの宿題、問題集に取り組む小中学生の自学自習をサポートするケースである。

ボランティア活動に参加しようとする学生の場合、多くは将来教員を目指しており、子どもたちとの関わりをもつことに抵抗はない。それでも教育実習を経験していない1,2年生で、ボランティアに初めて参加する学生の場合とまどいも多い。そのため、後述するように事前説明会、不安解消会を設定している。

また、震災被災の程度による隔たりや日程により大きな差があるが、各教委・学校から参加学生に対して子どもたちとの触れ合う上での留意点などがレクチャアされることも多い。

・登米市立南方中学校（学習支援）

南方中学校へは24年の夏休み以来、夏・冬休みの学習支援に繰り返し学生を派遣している。初の機会に京都教育大生を派遣したが、その折南方中学生、京都教育大生とも意気投合し、中学生から卒業式に出席するよう依頼があり、それに応えて4名の京都教育大学生が南方中の卒業式に参列している（本学学生2名も出席）。その後、前回参加した学生が再訪するため、同校へは毎回京都教育大生を最優先で派遣してきた。なお、今夏は日程、派遣人数の都合から大阪教育大生も加えたが、逆に宮城教育大生を派遣できず他大学との交流ができなかった点が悔やまれる。

- （京都教育大学院生）今回の活動をとおして、新たな出会いのすばらしさや、あらゆる人々への感謝の気持ちに改めて気づくことができました。参加者一同、人としても、教師を目指す者としても、また一つ成長できたのではないかと感じております。この経験から学んだことや考えたことは、今後の学習や教師人生を歩んでいく上で存分に生かし、頑張っていく所存です。
- （大阪教育大学生）南方中学校で過ごした5日間はとても充実していました。子どもたちからたくさんの元気をいただき、いろいろなことを学ぶことができました。「参加してよかった！」と学生はみんな言っていました。このような機会を用意していただき、本当にありがとうございました。今回学んだことを自分たちの大学生活や将来へ生かしていきます。私事ですが、これまでの経験を自分が教師になったとき、伝えていきたいと思えます。

②教員補助

・仙台市立中野小学校（T2・放課後支援）

津波により校舎を失い、近隣校の一部で学んでいる同校の子どもたちの学習支援や放課後の遊び相手、学校行事補助として10数名がチームを組んで支援を継続してきた。ボランティア学生の確保、日程調整、情報の共有など難しい問題を抱えている。

- （4年男子）さらに、一人一人の活動がより意味のあるものになるよう、ミーティングを週1回のペースで開きました。気になる子どもの情報共有や、関わり方への不安解消、全体的な活動方針の話し合いなどが目的です。しかし、必要感をもてるようなミーティングの運営にはまだまだ遠く、ミーティングをしなければならないものと位置づけてしまっているため、「できる人ができるときにやる」という空気感を作れていないような気がします。未永く、お互いにとって有意義な活動を行うためには、どのようなミーティングを行っていけばよいか、考えなくてはなりません。学習支援ボランティアとして、基本的にやることは変わりません。しかし、

来年で閉校してしまうこともあり、この活動がどのようなことを目指すべきなのかは、一人一人が考えるべき課題となります。前年度の反省をできる限り生かし、子どもたちを支える存在になれるよう、関わりを続けてほしいです（私自身が卒業してしまうので）。

・ 仙台市立七郷中学校（部活動支援）

当初、母校の学習支援ボランティアに参加した学生が野球部の指導も経験し、その後は部活動指導にかぎって週1～2回（大会前はさらに増える）指導にあたっている。

- （3年男子、「3年目を迎えて」）最後に、現在に活動が復興支援になっているかと聞かれると、正直自信がない。だが、復興というのは町並みや景色といった目に見えるものばかりではないと思う。その地域に住む人々の心に寄り添っていくことが一番大事なのではないだろうか。だから、長い目で見ていくことが必要があると思うし、これからの復興を担うのは今の子どもたちであることは間違いない。子どもたちには今必死になって「頑張り方」を学んでもらい、いずれはこの地域で活動できる「カッコいい大人」になってもらいたい。それは学校生活のなかの部活動を通して培っていけるものだと思っている。それが子どもたちの創る未来に、復興につながっていくのだと考えている。今のような考え方にまで引っ張ってってくれた七郷中の子どもたち、先生方、保護者の方々、そして教育復興支援センターの方々には本当に感謝してもしきれない。この恩返しは逸早く教師になり、多くの子どもたちの未来に関わっていくことで果たせよう。そして多くの経験を積み、いつの日か七郷に戻ってきて、今の子どもたちのその子どもたちを教える日がくればなと夢見ている。支えてくださる方々に感謝の気持ちをもって、これからも子どもたちのため、復興のために、今現在持てるすべての力を注いでいきたい。

3 ボランティア協力員

(1) 発足の経緯

本センターの開設は23年6月であり、個々に学生ボランティアの派遣等は行ってきたものの、財政的にも、人的・物的な意味においても実質的なスタートは24年4月からといえる。被災地の学校等からの学習支援ボランティア等の要請に応えるためにも、また、次代の教育を担う本学の使命を果たすためにも学生の力が不可欠である。

そして、これらの要請は5年、10年継続されるとの見通しから、24年6月、新入生から専攻ごとに有志1～2名を選出しボランティア協力員とした。協力員は本センターと全学生とをつなぐ役割であり、自らさまざまな活動に意欲的に参加するとともに各専攻の先輩、仲間に呼びかけ各種ボランティアの派遣要請に応える人材確保を目指すものである。

(2) 組織と分担

総会に出席した有志学生のなかから各学年の代表、副代表を選出するとともに、自薦により運営委員会を組織し、下記の各分担で企画、検討された案を審議し、承認を受け、それに基づいて各種会合等が実施された。

26年度の組織、担当者数は以下のとおりである。各組織は1～2年生が担当し、各係とも一部を除いて2年生がチーフである。3年生はオブザーバー的な立場とし、適宜企画に参加し前年度の経験に基づく助言を行うシステムである。

- ①総会（3名）
- ②不安解消会（6名）
- ③大学祭（6名）
- ④ボランティア報告会（6名）
- ⑤実態調査（6名）
- ⑥オープンキャンパス（6名）

⑦DVDの作成（若干名）

本センターで作成し、過去2年間新入生へ配布したのとは異なる。現在編集中。26年度の活動をまとめたもので、次年度の新入生オリエンテーションで披露する予定である（配布の予定はない）。

⑧その他（ホームページ、掲示、被災地視察研修、国連防災世界会議）（若干名）

(3) 26年度の活動

①新入生オリエンテーション 4月3日（入学式直後）

センター長のあいさつに続き、ボランティア協力員の2年生代表が務めた。本センターの開設の由来や教育支援ボランティア学生の活動の様子、新入生への参加を促すDVD、学生有志の編集による冊子を配布している。

冊子とは25年度末に刊行した、教育復興ボランティア学生編になる「架け橋——私たちにできること」である。大学祭で活動報告した9団体や、教育復興支援ボランティア協力員の活動報告、その成果と課題などが編集されている。参加学生の真率なる思いとともに、各教委、各学校長に加えて、保護者の方からも寄稿していただいている点が特徴的である。

②総会 4月23日

役員紹介、あいさつ。

前年度の活動報告（全体・個別）。

ボランティア協力員の説明、運営委員への勧誘。ボランティアへの積極参加と情報連絡方法の周知。

新入生代表・副代表の選出（自薦、承認）。

③不安解消会 7月16日

初めてボランティア活動に参加するにあたっての不安を取り除くために開催するもの。

2年生のボランティア活動経験者による体験談、アドバイスが中心。

「不安解消Q&A」（別記）の作成、配布。

④被災地視察研修

6月14日 気仙沼市内（ホテル屋上・リアスアーク美術館・旧気仙沼向洋高校舎跡）、南三陸町（防災庁舎等）

6月15日（半日コース）旧仙台市立荒浜小校舎跡、旧名取市立閑上中校舎跡、日和山

6月29日（半日コース）同上

6月30日 南相馬市原町区のがれき置き場、小高区中心部、同村上地区（沿岸部）等

11月30日 旧石巻市立門脇小校舎跡、女川町、旧石巻市立大川小校舎跡

⑤オープンキャンパス 8月1日（秋のミニオープンキャンパス 10月5日）

高校生に教育復興支援センターやボランティア協力員、運営などについて知ってもらい、興味をもってもらおうと企画。OCツアーに参加している高校生にポスター掲示とともにセンターやボランティアについて説明を行う。参加した高校生には説明を聞いての感想や今思っていることを付箋に書いてもらい、後日掲示した。直接センターを訪れた高校生には、DVDの上映やセンターの刊行物を配布した。

⑥大学祭 10月25日～26日

〈展示の部〉学習支援ボランティア活動、防災グッズ（新聞紙スリッパ、ローソク）

今年度実施した学習支援ボランティア活動の中から5つの活動の様子が描かれたパネルを展示し、協力員が来場者への展示資料の説明にあたった。また、震災時に簡単に作れる防災グッズとして、ローソクと新聞紙で作るスリッパの製作を参加者と共に行い交流を図った。

〈発表の部〉映画上映と講話、意見交換会

1日目は、日系アメリカ人監督が製作した映画、東日本大震災の姿を描いた「Stories from Tohoku」を上映し、

その後、カリフォルニア大学からの留学生で本大学院生による「日系アメリカ人から見た震災」の演題で講話が行われ、大震災を多角的な視点から学ぶことの大切さを知ることができた。

2日目は、2人の小中学校の先生方から、学校の被災状況とその後の学校再開や新しい防災教育について詳しく説明をいただいた。その中では、災害時の危機対応にあたって地域との連携の必要性や復興に向けた心の教育の大切さ、防災対応力を構成要素とした防災教育の年間指導計画の作成や小学校・中学校・地域の連携による防災訓練等の実践例と、学生ボランティア活動の重要性が強調されていた。その後、参加型企画として「子どもに震災を伝える」というテーマで出席者の皆さんと意見交換会を行った。

大学祭の企画・運営にあたって、「防災について考えよう！ 体験しよう！」のテーマのもとに運営委員の大学祭担当を中心に学生の視点に立った内容を企画し、広報から資料準備、運営まで行うことをねらいとした。特に、出席者参加型企画の意見交換会を設定し、子どもに震災をどのように伝えたらよいかについて話し合い、深める場となるよう準備を進めた。事前にプレ意見交換会を設けて学生同士でシミュレーションを行い、テーマA「被災した子どもが、していない子どもに対してどのようなことを伝えるべきか」、テーマB「被災していない子どもに対して、教師としてどのようなことを伝えるべきか」を設定した。

また、前年度からの課題となっていた参加者を増やすための対策として、学内掲示用の案内パンフレットの作成や出身高校への案内状配布など積極的な取組を行った。意見交換会では学生が司会進行を務め、発表内容を簡潔にまとめてスクリーンに映し出すなど議論を深める手立てを行ったことで、参加者の様々な意見を引き出すことができた。

大学祭のへ参画を通して、前年度の取組を踏まえながら学生同士が互いに協力し合い、ボランティア活動の意義や今後の防災教育の関心を高め、同時に、震災について考え、伝えることの大切さと難しさを学ぶ大きな機会となった。

⑦総会・ボランティア報告会 1月21日

協力員の活動報告（上記②～⑥）

個別の活動報告

・気仙沼市内小中学生への学習支援

○（2年女子）ボランティアをとおしてたくさんの人と出会いました。震災から立ち上がり気仙沼市を盛り上げようとしている人、子どもたちやお年寄りを支援している学生。本当にすてきです。自分もまだまだ勉強しなければ…と、いろいろな人に出会うたびに思います。ぜひ、いろいろな活動に参加してみてください、「新たな発見」があるかも…。

・栗原市内小学生（学府くりはら塾）への学習支援

○（3年女子）私は今年度夏休みに6年生、冬休みは3・4年生のサポートに入りました。（略）3年生の場合、集中力が切れてきたときにどのような声かけを行い最後まで学習に向かわせればよいのか、6年生の場合、自ら学習できるため逆にどのタイミングでどのような声かけを行えばいいのか迷うこともありました。活動を振り返ってみて今思うことは、子どもたち一人一人をよく見て、その子の性格に合った声かけを万遍なく行えばよかったということです。自分自身が子どもたちに遠慮してしまい、一人一人に声かけができなかったように思います。単に子どもたちがつまずいているところの指導を行うだけでなく、「字が丁寧だね」「姿勢がいいね」などといったよいところを褒める声かけもできればよかったなと思います。

・女川町小中学生への学習支援

○（2年女子）女川は初めていく場所だったが、被災地のなかでは復興は進んでいる方かなと感じた。しかし、校舎から見える景色はトラックや工事現場で、周りには仮設住宅が立ち並び、子どもたちが元気に遊べるようになるにはまだまだ時間がかかると思った。女川の方たちはみな温かく、たくさんのことを教えてくれた。

また、宮教生だけではなく、福岡教育大の学生とも一緒にボランティアをしたことで、他大学との交流を深めることができ、より充実したボランティアになったと思う。ボランティアをしに行くだけでなく、被災地の状況を観察することもでき、私自身とても勉強になった。とても有意義な5日間であった。

- ・ 仙台市立中野小学校での教員補助（4年男子）（別項）
- ・ 登米市立南方中学校での学習支援（京都教育大学院生・大阪教育大学生からの礼状紹介）（別項）

⑧実態調査 1月21日 アンケート調査用紙配布, 1月30日 回収, 年度内に集計・分析（予定）
内容は、ボランティアへの参加の有無、情報入手の方法、本センター・ボランティア協力員への要望等。

4 学習支援ボランティアを通じた学生の育成

(1) 事前指導等の充実

事前指導にあっては、下記のレジュメにより基本的な内容を確認するとともに、派遣先の被災地や学校等の事情を踏まえて指導している。また、学生が作成した「不安解消Q&A」も活用している。

これとは別に、ボランティアの派遣先である学校や教育委員会から実態に応じて濃淡はあるが児童生徒への対応の仕方、心構え等の指導がなされている。さらに、学生を被災現場まで案内し被災や復興状況の説明まで行っている教育委員会もある。

また、ボランティア活動実施中、支援実践部門担当者が各会場を巡回指導し気づいた点を指導助言するとともに、必要に応じて事後指導を行い、次の指導機会に反映させている。

①教育復興支援センター「ボランティアの心構え」

「ボランティアの心構え」(抜粋)

- 1 ボランティアとは？
 - (1) ボランティア (volunteers)
 - ・ 自発性・無償性・奉仕性
 - (2) 思いを行動へ！(はじめの一步を踏み出そう)
- 2 カウンセリングマインド (教育相談の心)

カウンセリングの機能 (方法、技法) をあらゆる指導・援助に活かす姿勢、心。

 - (1) 教育相談の4つの機能 ①治療的機能 ②予防的機能 ③開発的機能 ④教育的機能
 - (2) 信頼関係を深める自己開示 ①事実の自己開示 ②思考の自己開示 ③価値観の自己開示
- 3 私たちにできること (宮教生の責務・矜持)
 - (1) 宮城教育大学の使命 (学生、教員の育成、新しい教育の創造)
 - ・ 次代を担う児童生徒の育成
(確かな学力の定着・向上や心のケア、現職教員の支援)
 - ・ 「いま・ここ」で見聞し、体験したことを、次世代や全世界へ発信する
(「いま・ここ」に生きる偶然を必然と受け止め、全力を尽くす)
 - (2) ボランティアの「心構え」
 - ・ 刻々と変化するニーズへの対応
(被災地の状況、被災者の心情を推測・想像し、支援要請者の思いに応える)
 - ・ 出会いを大切に (気づきを重んじ、児童生徒の意欲を引き出す)
 - ・ 待つこと、聞くことの大切さ (難しさ) に気づく
 - ・ ホウレンソウ (報告・連絡・相談) を的確に
 - ・ あいさつはさわやかに、感謝の気持ちを忘れずに

② 「不安解消Q&A」(7項目の問いに、不安解消系の学生が自己の経験に基づき回答)

「不安解消Q&A」(抜粋)

Q 1 被災した子どもたちに接する際、何か気をつけることはありますか？

A 1 震災や被災状況についての話題は、持ち出さないように気をつけてください。筆者も被災者の一人ですが、普段震災を思い出すことは少なく、元気に過ごしています。しかし、震災の話題に触れると、辛く悲しい気持ちが蘇ってしまいます。よって、震災の話題は避け、ごく自然に明るく接しましょう！

Q 2 指導の際のポイントはありますか？

A 2 子どもたちは、夏休みの期間にせつかく学校に来ているのですから、単なる答え合わせにならないようにしましょう。分からない問題は一緒に考えてあげるといいですね。また、勉強法をアドバイスしてあげるのも良いかもしれません。

Q 4 最初の一言をかけるのが難しいです。アドバイスはありますか？

A 4 「ほめること」から始めてみてはどうですか？「よく来たね」「字がきれいだね」「頑張っているね」何でもいいのです。子どもたちは学生からの声がけを待っていますよ。

③事前指導と実際(気仙沼市と女川町における学習支援ボランティアを例として)

「学習支援ボランティアのなかでの子どもたちの心のケアのために」

夏休みを利用した学習支援ボランティアのなかで、学習の支援に限らず子どもたちの心のケアを意識した対応をとることにした。対象にした地域は、気仙沼市と女川町である。気仙沼市は人口の1.98%である1,454名が、女川町は8.88%である881名の尊い命が犠牲となっている地域である。それを物語るように、今年度会場となった気仙沼市内の9つの中学校のうち6つの中学校のグラウンドに仮設住宅が建てられている。また、女川町立学校に通う児童生徒の半数以上が仮設住宅で生活を送っている。このようなことから、2つの地域の津波被害の大きさが推し量られる。したがって、子どもたちの多くが被災者であり、心の傷が癒えないままに今を迎えているはずである。そのため、夏季休業中に学校に出向き自主学習に勤しむ姿には、学習に対する意欲以外に仮設住宅等の生活環境からの解放を目的にしている点があることにも配慮しなければならないと考えた。「中学1年生は、とにかく喋り、集まりたがる。自主学習のための教室がたまり場としての空間と感じてしまった。」という学生の感想にも物語られている。

そこで、これらの地域に学習支援ボランティアとして参加した気仙沼12名(早稲田大生2名)と女川11名(福岡教育大生6名)の学生を対象に、次のような働きかけをした。

- ・ 学習支援の際は、積極的な声がけに努めること。特に、難問に対し、自ら解決した際は大いに賞賛の言葉を掛けてやること。
- ・ 休み時間には学習以外のことを話題にして、多くの子どもと語り合うこと。

※留意点：被災状況について、学生から尋ねることはしないこと。「お父さん、お母さん」ではなく「家の人、家族」という言葉を用いること。

対応する子どもたちや環境が多様なために、具体性のない事前指導となってしまったが、学生たちはそれぞれの状況に応じた接し方をしていた。前述した中学1年生の教室の雰囲気遭遇した学生は、

○私が気をつけたのは、その騒がしい雰囲気を壊さないことだ。この学校は各地にある仮設住宅からのスクールバスでの登下校のため、地域で集まって情報交換をして楽しむような機会がないのだ。騒がしさのなかでも、生徒のリズムに合わせれば対話はできるものである。

また、子どもたちには、なかなか打ち解けられないままにいる子も多い。そのような子どもには

- 子どもの名前を呼ぶことに努めた。持ち物や学用品などから名前を確かめる方法は意外にあるものだ。また、トートバックなどの持ち物から子どもの趣味をさぐり、話の輪を広めることにも努めた。
- 部活や勉強、好きなキャラクターを話題にし、子どもたちと私にも共通点があることに気づかせることによって、親近感を感じさせるようにした。
子どもたちの性格は、積極的、消極的と様々である。交流の度合いに公平性を意識する学生もいた。
- 自分から話しかけてくる子どもには、対応する時間が多くなってしまう。これでは、他の子どもにとって私が存在する意味がない。そこで、頭の中に名簿を作って、チェックするような気持ちで触れ合い進めていった。
このように、学生たちがそれぞれのボランティア先で体験し、試みた支援の在り方については、宿泊先で毎夜行われたミーティングの場で共有されることになった。4～5日間のボランティア活動だったが、学習支援と同時に心のケアをも意識した活動は、学生にとって人との交流の在り方を学ぶ上で大きな収穫となったものとする。そのことは、次のような感想からもうかがい知ることができる。
- 子どもたちとコミュニケーションをとる上で、一番考えたことは『考え過ぎない。同情し過ぎない。』ということだった。被災地の子どもたちはかわいそうな子どもたちではない。普通の中学生だ。配慮は必要だが、変に気を遣っていたら、心を開いてくれないということが分かった。

(2) 「再(また) AER で学ぼう 宮教大防災3days」での発表

本センターの「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」の一環。震災復興について、大学の知見を広く一般市民に提供しようとする目的で9月19日～21日に仙台駅前のアエルを会場に開催されたもの。以下の2コマを学生が担当した。

①学習支援ボランティアについて(1,2年3名)

本センターや宮城教育大学の学生ボランティア活動の実際を報告したもの。

②被災地視察研修について(2,3年3名)

前年度に実施した気仙沼市、南相馬市への被災地訪問についての報告。

それぞれの地域出身者でなければ知り得ない情報や経験を伝えている。

(3) その他の活動

①国連防災世界会議に向けて(2年女子4名)

第3回仙台大会実行委員会からの依頼を受けて、開催期間中の半日(3月18日午前)、外国からの参加者を仙台市立荒浜小学校、名取市立閑上中学校の旧校舎、日和山等を案内するもの。現地視察を繰り返し、英語によるパンフレットづくりや活動する様子を地元テレビ局が取材、報道している。

②県外の各種団体との連携(1年男子)

南三陸町出身で、教員である父親を亡くしたことが機縁となり、被災地支援に訪れていたボランティア団体と知り合い、徳島市、神戸市、福岡市、東京都での各種研修会等へ参加している。その活動の様子が教育系新聞に取り上げられている。

③各種企画(4年男子)

25年度企画した被災地視察研修が福島、宮城の地元新聞に取り上げられている。上級生のために協力員ではないが、センター教職員と連携し新聞づくり、Ipad研修の講師を務めるなど、各種ボランティア活動に意欲的に参加してきた。

5 おわりに（成果と課題）

本稿では、学生自らがボランティア活動に参加し、協力員として各種行事を企画・運営するなかで、さまざまな立場の方々と出会い、業務を遂行することにより人間的な成長が図られるだろうと仮説を立てた。そして、その点に関しては、本文中に引用した学生の感想、意見や提言、謝辞等から、仮説の検証できたといえよう。

具体的な内容としては、次のようなことが挙げられる。

- ①個人として指導法の改善に心がけるだけでなく、他の学生の指導法や声かけの仕方から学ぼうとする姿勢がうかがえる。
- ②学習指導法に限らず児童生徒の立場や心的状況の把握に努め、情報交換、共通理解に立って支援にあたる姿が認められる（被害の大きかった被災地での宿泊を伴う支援活動にあっては欠かせない情報交換である）。
- ③本学学生同士の交流にと止まらず、他大学の学生との交流を通じて視野の拡大、本学学生としての責務を再確認する機会となっている（ボランティア活動終了後も他大学学生と交流する姿も認められる）。
- ④ボランティアとして学習支援等を行うという立場から、活動をさせていただくという意識、周囲に対する感謝の言葉が認められる。
- ⑤ボランティア活動継続の意義を認め、卒業等により自らの活動継続が困難なことから後輩学生を積極的に勧誘し、後継者の育成に励んでいる。
- ⑥国連防災世界会議での発表は特別なケースであるが、自分たちの活動を外部や未来に向けて発信しようとする意欲や使命感の萌芽が認められる。

その他、各行事への主体性、創造性に加え、準備段階から行事遂行に至るまでの連帯感、実行力には目を見張るものがあつた。改めて、センター長のいう「学生の使命感、実践力が大学の宝である」を実感することも多い。

しかし、それであればあるほど、協力員等の限られた学生だけでなく、できるだけ多くの学生に被災地の児童生徒と交流し、その心情を慮り、共感することで「人間力の育成」に努めたい。また、一人でも多くの学生が自らの思いを実際行動へ移すための方策を追究していきたいと考えている。

そうした学生の活動を支える意味でも、宮城教育大学、教育復興支援センター、本学学生が改めてその使命を再確認し、これまでの活動の充実と継続を図らなければならない。特に、震災後4年あまりを経て、刻々と推移する学校や教委等のニーズを見極め、双方にとって貴重な体験となるよう、指導の充実を努めたい。

センター（支援実践部門担当者）として、学生の具体的支援策として、以下の5点を掲げておく。

- ①何かやれることはないか？⇒現地の実態、要望を知らせる（被災地視察、活動報告会、防災教育の充実）
- ②自分にできるだろうか？⇒不安の除去（不安解消会、「Q&A」の配布、事前説明、現地指導の充実）
- ③異なる経歴、立場との交流⇒他大学生との交流を促進するために派遣先の調整、現地での反省会の充実
- ④活動の継続性⇒ボランティア活動参加者への経済的支援（保険料、交通費、宿泊費等の費用負担の継続）
- ⑤参加人員の確保⇒学生の多忙化（授業時数、部活動、アルバイト等）への対応、人的ネットワークの活用
本学にあつては、多くの学生が教員を志望している。教員になるための指導は各専攻・コースやキャリアサポートセンターを中心に行われているが、本センターとしても側面から援助していきたい。「人間力の育成」に止まらず、授業力、子どもたちとの信頼関係の構築等、教師としての資質の向上に貢献することがに努めていきたい。